大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ゲオルク・フォルスターと「未開人」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006183

ゲオルク・フォルスターと「未開人」

船　越　克　己

1

そこには「棍棒」が展示されていた。その大きさ、形、色はさまざまであった。筆者は南洋の島々で使われていた「棍棒」Keulen なるものをはじめて見た。それには念入りに彫刻を施したものもある。手に取ることは禁じられているが、見た目はずいぶん硬そうである。ゲオルク・フォルスターの『世界周航記』にしばしば登場する用具である。ここの博物館に運びこまれた南洋の品々に、筆者は衝撃と感嘆の念を禁じえなかった。1999年春に国立民族学博物館（大阪府吹田市）で開かれた企画展、「南太平洋の文化遺産 ― ジョージ・ブラウン・コレクション」の会場での貴重な経験である。またそこには「食人用フォーク」があった。「食人のさいには死者の霊をおそれ、直接手でふれぬように木製フォークが用いられた」[1]という。

イギリス出身のメゾジスト派の宣教師ブラウン（1835－1917）が集めた「棍棒」は、いわば原産地から切り取られ、博物館の展示台の上に立て掛けられている。それらは南洋の人びとの日常のなかで、移動し、働いていたはずである。そこの風土にあって、用具は作られ、呼吸し、生きていた。ゲオルク・フォルスターがニュージーランドの南島のダスキー湾で目撃したのは、まぎれもなく原住民の手ににぎられている「棍棒」であった。1773年4月6日、クック船長のボートには風景画家ホッジス、博物学者スパルマン、フォルスター父子が乗っていた。ボートはある島のそばを通り過ぎた。数日まえから原住民は姿をみせるが、かれらはクックの一行に背を向けて逃げたようである。西洋人の訪問はかれらにとって最初ではないはずである。しかし、なにやら風景をスケッチしたり、植物を採集したり、鳥類やアザラシを銃で撃ちまくっている異人は、原住民にとってはまったく不可解な未知の人種であったろう。クックの一行はくだんの島の岩壁の上に１人の原住民を発見する。ゲオルクにとっては、原住民との最初の対面であった。

ダスキー湾の住民がヨーロッパの訪問者をどんな気持ちで迎えたか、それを語るかれらの文字記録はないだろう。残っているのは「棍棒」のみである。それに対し、はじめて原住民と対面したゲオルクはつぎのような記録を残す。ゲオルクにとってこの出会いは、きたるべき南洋の世界の体験の序幕であった。

> さらに近づくと、それは武器として棍棒あるいは戦斧をたずさえ、岩の尖端に立つ１人のインディアンであることがはっきりと認められた。その男の遠く背後に、森の入口のところに、２人の女が見えた。それぞれ手に槍をもっていた。［...］クック船長は未開人の鼻に自分の鼻をこすりつけた。これが相互にあいさつを交わすかれらのやり方であった。［...］いまや、わた

したちとインディアンのあいだに、ちょっとした話し合いが生まれた。しかしそれをきちんと理解できた者はいなかった。相手の言葉に堪能な者がいなかったからである。[2)]

この場面は原住民側からすれば、来訪者の接近を拒絶しようとする場であり、ヨーロッパ人からすれば、未開人に対する懐柔の場である。棍棒を振り回し、激高して何やらわめき散らすインディアンを静めようと、クックは岩に降りて、数枚のまっ白な紙をかれに差し出す。はっきりと恐怖の色を浮かべながらも、ついにインディアンはその紙を受け取った。クックはかれの手をつかみ、抱擁し、鼻をこするあいさつを交わした。原住民の扱いについては、1つの指針があった。いわく「かれらに贈り物をして、かれらとの友情と同盟を求めること」。[3)]

南方大陸を発見し、南洋の島々に関する海図を作成し、交易の道を開くという、クックの第2回世界周航の使命を博物学者フォルスター父子がどれほど意識していたかは定かでない。しかし、フォルスター父子の使命は博物学の範囲に限られていたことはあきらかである。じつは息子ゲオルク・フォルスターにとっても探検旅行はこれが最初ではなかった。わずか10歳のゲオルクは1765年に、父とともに数か月間ヴォルガ流域のドイツ人植民地の調査旅行をおこなっている。ゲオルクはそこで採集した植物をリンネの体系によって分類した。さまざまな民族の観察もした。ロシア旅行の体験は生涯、ゲオルク・フォルスターの主要な関心の基礎を培ってやまない、と G.シュタイナーは断じる。その関心とは、「人間の、もろもろの民族の本質と生活関係を自然、風土と歴史との関係において見ること、この関連を考慮しつつ、どうすれば人びとの生活が改善されうるか、それを熟慮すること」[4)]である。

『世界周航記』（ドイツ語版は1778－1780）の著者ゲオルク・フォルスターは南洋の住民をしばしば「インディアン」Indianer あるいは「未開人」der Wilde（本稿では「野蛮人」とせず、こう訳すことにする）と呼ぶ。それに対して、フォルスターはみずからを「ヨーロッパ人」Europäer と呼ぶ。南洋の住民を名指すに、フォルスターが安易に上記の伝統的トポスを用いた、とは考えられない。かれはいわゆる書斎のナチュラリストではなく、現実の対象の観察者であったからだ。「高貴な未開人」[5)] der edle Wilde について詮索することは、この博物学者のフィールドワークの課題になりえなかった。

フォルスターにとって「ヨーロッパ人」の概念はいかなるものであったのか。一言につづめれば、それは「文明の進行」[6)] (der) Fortgang der Civilisation の担い手である。フォルスターはヨーロッパと文明は不可分の関係にある、と考えていた。しかしながら、フォルスターにとって南洋は、「文化に病む」人間が心の安らぎを見いだす地、「エキゾチックな世界としての別世界」[7)]ではなかった。それにもかかわらず、フォルスターにとって南洋はひとつの「別世界」であることに、かわりなかった。博物学者の目で南洋の地域を観察したとき、ヨーロッパ文明に対する疑惑の念がわいてきたのも、また事実である。ヨーロッパ文明に対する信仰と疑問、このアンチノミーこそ、フォルスターの南洋の記述に映しだされている興味深い要諦である。E.ベルクはいみじくも、つぎのように指摘する。「訪問した南洋の諸民族に関して、フォルスターがものにした叙述は、かれ自身の文化のもつ精神的状況の叙述としても読むことができる。」[8)]

われわれは先ほど、1人の未開人と1人の文明人たるクックとの出会いとあいさつの光景を、フォルスターの筆を通じて目撃した。ひとりの人間と他の人間、ひとつの民族と他の民族を決定的に分かつ要素ともいえる、文化の内実とは何であろう。それを、博物学者ゲオルク・フォルスターが提起し

たいくつかのメルクマールにそって、ながめていきたいと思う。

2

トドロフは『他者の記号学　アメリカ大陸の征服』のなかで、スペイン人のアメリカ原住民にたいする態度をつぎのように紹介する。「インディオの肉は生き残ったインディオとか犬に食わせるために使われる。［...］彼らは食肉用動物と同一視されているのである。」[9]このように他者を「物体」とみる「奴隷制擁護」のイデオロギーに代えて、やがて他者を「生産可能な一主体」とみなす「植民地主義」のイデオロギーを新大陸が「選択した」ことを、トドロフは指摘する。そのような変遷はすでにギボンがのべているが、それは人類の歴史における必然の方向であるように思われる。ローマ帝国の秩序が安定するまでは、長年にわたって、「暴力、略奪」の時代がつづいた。しかし、「奴隷に対する生殺の権が、いまや個人の手から奪われ、ただ行政官だけに認められるようになった」。[10]

ゲオルク・フォルスターは論文『パンノキ』(1784) において、やっと週に一度だけわずかな食餌にありつける、西インド諸島の「不幸な黒人奴隷」のためにパンノキを栽培せよ、という「博愛的」提案がイギリスでは受け入れられない現状について言及している。そこでフォルスターは奴隷に関してつぎのようにのべる。ファブリーチウス (1743－1808) が主張するように、たとえ黒人は「猿」Affen と「人間」Menschen の雑種であるとしても、「すべての家畜のうちで、最も有用な家畜として」、他の家畜と同じ世話を受けなくてはなるまい。この皮肉ともとれるコメントのあとで、フォルスターはそのような考えは試練に耐えうるものではないとして、つぎのように黒人の尊厳を擁護する。「この虐待された被造物は、その起源がいかに不確かであれ、にもかかわらずまぎれもなく人間として、意識と理性によって、われわれと心情を分かつもっともな権利をもつ。」[11]フォルスターはリンネの体系を指針として、生物学的にも、黒人をヒトの部類に入れて理解していたようである。論考『人種論を再考する』(1786) からみるかぎり、フォルスターは霊長類（サル目）とサル目ヒト科の人間との交わりから、人間たるニグロが生まれるとは考えていない。異なるスペキエス（種）のあいだでの「交配」は論外なのである。[12]

上に引いたトドロフ、ギボン、フォルスター、ファブリーチウスの言説がいかなる側面から奴隷制を語っていようとも、奴隷たる運命を背負わされたひとりの人間の悲惨が変わろうはずがない。しかしながら、18世紀の啓蒙主義は、文明批判の文脈において、文明人としてのみずからの存在を未開人のそれと比較することによって、未開人を人類史の構成要素に数えたのである。いわゆる自由・平等・博愛の思想は、奴隷におとしめられた未開人と、文明社会のなかで富を支配する者によって搾取される階級とのあいだに、パラレルな関係をみるのである。たとえばルソーは「富者」を「ひとたび人肉の味を識るやいなや、他の一切の食料を見棄てて、以後は人間を貪り食うことしか望まないあの餓えた狼」[13]に譬える。ヨーロッパが世界の他の部分にくらべ、「よりよく開花した」理由の１つは、ヨーロッパが「鉄」と「小麦」に恵まれていたからである。[14]ルソーは人類の原始状態の思いをはせ、そこには「野蛮人の愚昧と文明人の忌まわしい知識」からも遠い、人間的な「優しさ」がある、とのべる。[15]また現に未開人とよばれる者の多数は、「ヨーロッパ人の逸楽を軽蔑し、ひたすらその独立を守ろうとして餓えや鉄火や死をすら物ともしない」[16]と記す。16世紀のモラリストたるモンテーニュ

から18世紀のフランス啓蒙主義者にいたる、未開と文明の問題提起を、ブレナーはつぎのように定式化している。「原則的には、すでにモンテーニュにおいて展開された『原始状態』と『文明』の対比モデルは、ルソーによって哲学的に洗練され、ヴォルテールならびにディドロによってそれぞれ変化させられた。」[17]たんにアフリカ、南米、オセアニア地域の対象にとどまらない、今日の文化人類学的フィールドワークにつながる1つの出発点がここにみられる。

『世界周航記』におけるゲオルク・フォルスターの未開人に関する記述は、またE.ベルクもいうように、「モンテスキュー、ヴォルテールそれにディドロにさかのぼる伝統」[18]を継承する、といってよい。フォルスターが未開人とその生活を観察し、記述するとき、ヨーロッパ文明はフォルスターにおいて、つねに指標の役割をはたしている。たとえヨーロッパ文明が、かの「伝統」に端を発する文明批判によって、陰りをみせることがあっても、である。

世界周航の旅で、フォルスターに文明と未開の落差の現実を強烈に見せつけた場所がある。太平洋の航海を終えて、大西洋へ抜けるさい訪れた南アメリカの先端のフエゴ島（Tierra del Fuego＝火の地）である。かれらのカヌーのなかには焚き火が燃えているが、ほとんど丸裸の子供たちは寒さでブルブル震えている。住民たちも古びたアザラシの毛皮をほんの少し首のまわりにつけていた。それにぼろ切れで申し訳程度に身を隠している。その光景は自然の猛威のまえに、なすすべもなく暮らす未開人の生活を物語っていた。それに加えてかれらの身体はどうだろう。でっかい頭、ぺちゃんこ鼻、とても突き出た頬骨。目は褐色であるが、小さく疲れ切っている。鯨油を塗りこんだ、黒い髪の毛がもじゃもじゃ頭部を覆う。いつもポカンと開いた口には、絶えず鼻汁が流れこんでいる。フォルスターはそれを「ひどい貧困を語る完璧で、最も雄弁な姿 Bild」[19]と形容する。

残念ながらというべきであろうか、それともさもありなんというべきであろうか、われらのフォルスターも、U.ビテルリィが指摘する「欠陥人種」[20] Mängelwesen としてのインディアンよろしく、フエゴ島の住民をじつに否定的にとらえている。ビテルリィによれば、異民族の記述方法は18世紀に至るまで、ほとんど変遷はみられない、という。「白人の容姿、性格、道徳、文明水準」が異文化を測る尺度となっている。とはいえ、未開人の特徴はアンビヴァレントな評価をヨーロッパ人に意識させたのも事実である。たとえば、インディアンの裸体は「動物に近い野蛮状態」を表すと同時に、「原罪以前の人間の無垢」[21]を指示する、というように。しかし、ことフォルスターのフエゴ島住民の記述に関するかぎり、そのようなアンビヴァレントな評価は見当たらない。

それではフォルスターの評価を少しくわしく見ることにしよう。レゾリューション号は1774年12月下旬にクリスマス湾に1週間停泊している。この地の光景においても、フォルスターは「ひどい貧困」を目撃した。南半球であるから、季節は「初夏」であり、岩棚には「美しくて、香りのいい花」も咲いていた。とはいえ、陽光は雪をすっかり溶かすほど強くなく、まるで「冬のように硬直し、寂寥とした」陸地も見える。これが、フォルスターによってフエゴ島の住民として記述された人びとの生活の舞台である。

クックあるいはフォルスターはかれらの愚鈍な性格について、すでにブーガンヴィルによって1つの情報を刷りこまれていた。「これらの未開人は背が低く、醜悪で、痩せこけており、耐え難い悪臭を放っている」[22]とフエゴ島の住人について、ブーガンヴィルは伝えている。かれらはいつも「ペシュレ」Pécherais と叫ぶので、ブーガンヴィルはかれらをペシュレ人と名づけた。「わたしが生涯に見

た未開人のうちで、ペシュレ人は最もみじめな生活を営んでいる。換言すれば、いまだに自然状態にある。」[23]かれらの「ペセレー」Pesseräh と響く言葉は、フォルスターにきわめて不快な印象をあたえた。それは「慟哭し、嘆き悲しむ語調で」発音されるからである。タヒチとは、何たる相違であろう。ヨーロッパ人の目をたのしませるタヒチの女たち。すでに以前の旅行者たちによって作られた辞書のあるタヒチ語。タヒチ語はフォルスターにとって、「最もやさしい言語」[24]であった。すべての硬子音と歯擦子音を追放し、ほとんどの語は母音で終わるタヒチ語。最小限の子音しか残していない言語においては、母音の多様な変化を区別する鋭敏な聴力があればいい。それに対して、「ペセレー」人の言葉はかいもく聞き取れない。かれらの発音はことごとく、非常に強い舌もつれ音をともなうからである。[25]フォルスターをいらだたせたのは、かれらとコミュニケーションができないことであった。南洋のどの島でも、そこの住民がどんなに低級であれ、どんなに単純であれ、フォルスターたちのジェスチャーは理解された。しかるにフエゴ島では、いかなる合図も通じない。

「合図言語」Zeichensprache を含め、ヨーロッパ人の言語をかれらは理解しない。かれらはヨーロッパ人に「かれらの言語を教えよう」ともしない。かれらは「好奇心や欲求」をもっていないようだ。ガラス玉とか、そのほかの小間物を差し出しても、それを無造作に受け取り、かれらの武器とか、ボロボロのアザラシの毛皮をあてどなく手放す。ともかく何をくれてやっても、そのような品物を出す。そこには何ら判断力もない。注意力もない。フエゴ島の原住民は「愚鈍、無関心、無為」[26]がこのうえなく奇異に混ざりあった人種なのだ。

山中速人氏は論文「太平洋『探検』とメディア」において、クックの太平洋探検の「情報」提供の意義を強調している。その情報を分析すると、太平洋先住民族に対するヨーロッパ人の見方には、2種類が存在していたことを紹介している。すなわち、先住民族を「楽園（アルカディア）」の住民にたとえる見方（18世紀、新古典主義の自然観）と先住民族を野蛮視する見方（19世紀、進化論）である。[27]フォルスターの『世界周航記』における観察には、その2つの見方が混在しているが、その相反する見方双方の基底には、未開に対するヨーロッパ文明の優越性の認識があったことは確かである。しかし思うに、フォルスターは何よりも博物学者であった。つまり、動植物の標本を収集したのみならず、原住民の容貌、生活をあたうるかぎり観察・記述したのである。文明という指標は、いわばフォルスターの観察・記述がそこに結晶する核とみなしうる。「進化論は、博物学の発展に支えられてうまれた」[28]（八杉龍一）とすれば、情報源としての『世界周航記』はヨーロッパの読者に、文明の発展（＝進化論）に対する正当性の観念を抱かせるのに、貢献したかもしれない。「当時形成されつつあった大英帝国の世界システムの中にタヒチを位置づける」[29]クック、そして広い意味での進化論的観点から楽園と野蛮の南太平洋地域を語るフォルスター、この2人の探検家はその言説において、すでに19世紀の趨勢のなかにいた、といえよう。

フォルスターは植民地主義的人種論者であった、すなわち奴隷を動物とみなしていた、と決めつけることはできない。むしろかれは奴隷に人間的尊厳を付与しようとした。しかし、あらゆる他者を自己と同程度の重みをもつ存在とみなす認識の地平、すなわち公平な意味における脱進化論的地平には、フォルスターはまだ到達していなかった。それを如実に示すのは、救いようのない、フエゴ島の未開人に関するかれの観察である。

これほど動物に近く、それゆえこれほど不幸な人間はおそらくいないのではないか。この人たちは、寒気と裸体をとてもやりきれないほど体に感じているのであるが、それでも分別と思慮をまったく欠いている。だから寒気と裸体から身を守る手段を考え出すすべを知らないのだ。諸概念を相互に結びつけることもできぬから、かれら自身の貧弱な状況を、ほかの住民のずっと幸せな状態と比較することができないのだ。[30]

フエゴ島の住民のみじめな生活は、ヨーロッパ人には周知のトポスとなっていたのかもしれない。イギリスの探検家ダンピア(1652−1715)はオーストラリアの原住民アボリジニについて、「かれらすべては、わたしが今まで見た民族のうちで、最も不快な容姿をし、最も邪悪な目鼻だちをしている」[31]とのべている。K.H.ベルナーが指摘するように、アボリジニは「フエゴ島の住民やニュージーランドのマオリ族と同じカテゴリー」[32]に入れられたのだ。これらの種族は「高貴な未開人」としての誇りを、何ひとつもたない。先にふれたブーガンヴィルの「ペシュレ」人と同じように、ヨーロッパの文明進歩の道においてはるか後方に位置する人びとである。すなわち、『世界周航記』に記されたフエゴ島の住民はヨーロッパ文明の視野の外に置かれたのでは、決してない。

のちに、フォルスターは『人種論を再考する』(1786) において、ニグロと白人は別々の「人間の種族」[33] Menschenstämme であろう、という可能性を提起する。これはいわゆる白人優越主義と根本的に矛盾する考えである。さらにいえば、オーストラリアの海岸べりに住む「未開人」は、フエゴ島住民と同じように、「無為で怠惰な」[34]人びとである。にもかかわらず、この論文『オーストラリアならびにボタニー湾のイギリス植民地』(1786) はオーストラリアの原住民が文明の道を進む可能性を示唆する。「ヨーロッパの入植者」が「これらの教育はない ungebildet が、それにもかかわらず野蛮ではない nicht barbarisch 原住民」[35]に好ましい「影響」をあたえることができるからである。ヨーロッパ人は「粗野で劣悪な人間」rohe und verderbte Menschen を「教育し、完成する」[36] bilden und vollenden 義務をもつのである。このすぐれて啓蒙主義的思考が、きたるべき世紀の植民地主義のイデオロギーをどのような意味において支えているのか、という議論は、E.W.サイードの『オリエンタリズム』(1978) 以後の議論の文脈に入れるのが、より生産的であろう。

先にのべた醜い未開人の描写はいうまでもなく、比較の産物である。比較の能動主体は18世紀のヨーロッパ人、その受動主体はヨーロッパ人との接触を余儀なくされたオセアニアの住民である。われわれ日本人はイエズス会の宣教師フロイス(1532−97)をはじめ、ケンペル(1651−1716)、ツュンベリー(1743−1828)、シーボルト(1743−1828) などの日本記述により、観察された対象としての日本人像を知ることができる。もちろんそれらは数ある「日本人論」の一片にすぎないであろうが。[37]

『世界周航記』 において、原住民の容姿、あるいは面相や服装が「醜い」 hässlich ものとして記録されるとき、そこにはヨーロッパ人がギリシア文明に求めた美の規範の裏面が叙述されているものと思われる。美醜をさえ、歴史化する18世紀の一典型をわれわれはフォルスターにおいて見取るのである。それをつぎに見ていきたいと思う。

3

どんなによこしまな詭弁が、市民的制度とは正反対の、自然のままの未開の生活の利点を挙げるために、何を申し立てようとも、われわれはこれら「ペセレー人」のどうにもならない、哀れむべき境遇ただひとつを思い浮かべれば、こと足りる。そうすれば、われわれはこの文明化した制度 gesittete Verfassung のもとに暮らしている方が、かぎりなく幸せであることを、心底確信できるだろう。[...] 文明化したわれわれ諸国民はむしろ悪徳によごれている。この悲惨なペセレー人、すなわち理性をもたぬ unvernünftige 動物に直接、境を接している悲惨な人間でさえも、犯していない悪徳にである。[38]

この文章はあのフエゴ島住民の描写のつづきである。かれら自身は文明のにない手としての、自己意識はもっていないであろう。しかし、フォルスターの目には、かれらは動物同様の存在であった。しかしかれらは紙一重で、「理性をもたぬ動物」とは隔てられているのだ。ヨーロッパの啓蒙主義のヒューマニズムは、まさにこのテーゼに内包されているのではないか。人間であるかぎり理性をもつ、というテーゼは文明肯定のテーゼとともに、その普遍性を獲得する。なぜならば、理性は未開人のうちに眠る「素質」の「多様な」実現を是認するからである。「さまざまな能力が存在するところでは、それらの進化を通じて、完全な状態が達成される」、と数年後に書かれた論文『オーストラリアならびにボタニー湾のイギリス植民地』（以下、『ボタニー湾』と略記する）にある。ところでこの論文には、奇妙な特色がうかがえる。というのも、ここには『世界周航記』で見られた文明批判が姿を消しているのである。

上に引用した文章でいえば、後半の部分、すなわち「悪徳」というヨーロッパ文明の負の側面を糾弾する部分が、『ボタニー湾』から消えているのである。先のヨーロッパ文明のしでかした「悪徳」とは何かは、そこでは明言されていない。しかしそれは鉄器をはじめとする文明の利器が、すなわち「高度な知識と判断力」によって生産された奢侈品が、南洋の牧歌的（とみえる）世界を破壊しはじめた事態を指していることは、まちがいない。それでは『世界周航記』にみられた文明断罪の部分が、ここ『ボタニー湾』で欠落していることには、どんな意味があるのだろうか。

アカデミー版『フォルスター全集』第５巻（「民族・地誌学に関する小著作集」）の注釈は『ボタニー湾』の特異性にふれ、「ルソーの文化批判に対し、決定的に一線を画す態度」[39]がこれほど首尾一貫して表明されているのは、この論文をおいてない、と指摘する。あるいは「第３の」大陸［＝オーストラリア大陸］に対するフォルスターの歴史的予想は「何ら制約のないほど楽天的で」あった。ヨーロッパの海外拡張政策に対して、つねに「矛盾」を抱いていたフォルスターであるが、こと『ボタニー湾』に関しては、植民地史に対するかれの「二律背反」の態度はみられない。その理由として、オーストラリアの原住民の数が少ないとか、フォルスターに届く「情報」量が不十分であったとかが考えられる、という。

文明の進歩を信奉する者にとって、喉の刺ともいうべき、文明のもたらす負の部分が論文『ボタニー湾』から抹消されている、という事実は、それが豊富な動・植物と鉱物の資源を予想させるオース

トラリアへの植民を論じるがゆえであろうことを看取して、オーストラリアの特殊性に解消できるであろうか。ここで1つのキーワードとなっているルソー主義に対する、フォルスターの根本態度をながめたい。そのためのテキストは論文『発見者クック』(1787)とアカデミー版『全集』第11巻(「書評」)とする。

フォルスターはまず、クックの探検活動の「道徳的価値」を問う。そして「人間の自然的規定physische Bestimmung」[40]のみが、唯一正しい規定である、と主張するルソーに論戦をいどむ。「知識が人間のあらゆる悲惨の根源」なのであろうか。なるほどまじめに考えれば、「人間のなかのさまざまの能力の発展」と「破壊」は不可分の関係にあるようにみえる。しかし、もし人類の「発達」Ausbildungが現状とはちがった方向に向かっていたらどうか。そもそも「完成能力」Perfectibilität は「自然」の対極にある、と偽証されたために混乱が起きているのではないか。この問題に対し、フォルスターは1つの回答を用意する。

否、それは回答という、一時的な便宜を示唆する類いのものではない。それは同時代人にとってあたかも造山運動のごとく激動する、きたるべき革命の時代を生き抜くための、フォルスターの認識原理とみなさねばならないだろう。いわく、「自由は必然と繋ぎ合わされている」[41]と。その意味するところを、フォルスターはつぎのようにいう。「行動に思想が先行する、と主張する大胆不敵な思想家の熱烈な意識と、いかなる考えも無から生まれることはできない、という不動の真理とのあいだに、永遠の闘争が生まれる。」われわれは「永遠の闘争」という言葉に注意しよう。自由と必然のどちらかが勝利するのではない。この問題に関して、わたしはK.-G.ポップの意味深長な指摘を引用しておく。「フォルスターにとって『完成能力』、つまり人間の阻止できない完成指向、不断に進展する啓蒙主義と文明は、人間の本性のなかに存在する法則的なものであり、かつ自然との人間の矛盾に満ちた対決のなかに存在する法則的なものである。」[42]ふたたびフォルスターの言葉で語るならば、人間の「自然的」規定と「道徳的」規定を区別するやり方は、現実離れした「観念」の産物でしかない。

ものごとにはすべて裏面がある。たとえば「太陽」は蠟を溶かすが、粘土を固まらす、とフォルスターは説く。もしも太陽なしですませたいと願う者がいたら、その者は「妄想から出発し、人類を理想によって測るヒポコンデリー患者である」[43]と断じる。フォルスターがルソーを念頭においていることは、想像にかたくない。

さらにフォルスターがルソーのどんな側面を非難しているかは、フォルスターの『書評』に散見される批判軸によっても推測できる。フォルスターのルソー批判は、ルソーにおける「未開」Wildheitの称賛に向けられる。「人間は、ルソーによってじつに不当にも優先権をあたえられた幼虫生活の段階に、絶対に停滞することはできない。恵まれた環境がどこかで、いつかあるとき、人間のもろもろの能力を明るみに出すことがあれば、それだけでもう人間は未開の状態に停滞することはできないのである。」[44]フォルスターは、「未開」を人類の進歩によって克服さるべき悲惨な状態とみなす。だから「社交」[45] Geselligkeit よりも「未開」の貧困な状態の方に優位を認めようとするルソーは、とうてい許しがたい存在であった。ルソーは「未開の自然人を高く賞揚する、新しい哲学者」[46]とも、「未開人の放縦に対する狂信」[47]を時代に伝染させた「さる有名なソフィスト」とも評される。

かのヴィーラントも『人間の悟性と心情の秘密史に関する論集』Beyträge zur Geheimen Geschichte des menschlichen Verstandes und Herzens (1770) において、ルソーに対する批判的態度を表明している。

「自然人から社会状態に至る発展が人類史の突然の堕罪としてではなく、漸進的移行として理解されることを望む」[48]ヴィーラントはルソーの自然と文化の断絶説を批判した。しかしヴィーラントのルソー批判には「独創性」が乏しく、当時においてもあまり注目されなかった、と『ドイツにおけるルソー』の著者E.ヴァルターは評している。[49]

先に紹介した、『書評』からみたフォルスターのルソー批判もそれじたいとしては、ヴィーラントのそれ同様、オリジナリティーに乏しいかもしれない。ヴィーラントは、ルソーが「自然の状態から良き秩序 Policierung の状態への移行」[50]をどのみち「乗り越えがたい困難」に囲まれた事実とみなしている、ことに疑問を感じる。いわく、ひとりの人間はまず、ひとりの女を娶ることを思いつくであろうことを、ルソーは理解できないのだ、と。フォルスターのルソー批判には、ヴィーランドにおけるような空想力の横溢はみられない。しかし、フォルスターをヴィーラントと分かつ要諦は、前者における文明の進歩に寄せる情熱ではなかろうか。

ふたたび『発見者クック』から、自然に帰ることの不合理を、フォルスターとともに例証しておきたい。多くの「革命」の経過が示すのは、革命が「根拠のない仮説の上に建てられた理想的制度」を粉砕する、ということだ。現実はいわれなき理想郷の存在を許さないのである。フォルスターはおそらく専制政治を念頭においているのであろうが、つぎのように警告する。数千年まえのアジアで、数世紀まえのペルーとメキシコで、そして今なお南洋諸島で起きている事態は、もしも人類が「いわゆる自然の状態」に帰るならば、ただちに実現するだろう、と。なぜ「自然の状態」はそれほどに危険なものなのか。フォルスターはその根拠を人類の「文化」のなかに求める。「初期の戦争は、それが未開人の戦争であれ、文化の萌芽を含んでいる。なぜならば、征服者がその勝利を享受するうちに、かれの欲望は増大するのだ。ひとつ素性より出た落し子ともいうべき奢侈、芸術、学術はたがいに婚姻関係を結び、新しい一族 — 怪物と天才 — を生む。」[51]フォルスターがつねに主張するテーゼは、人間は自然によってあらかじめ「素質」をあたえられている、ということだ。人間の素質は、「外部関係の一撃」[52]があれば、「必然的に、阻止されることなく」成長する。

フォルスターのルソー批判の最大の問題点は、ルソーの社会契約論の否定である。周知のように、ルソーは社会契約の骨子をつぎのように説明している。「この基本契約は、自然的平等を破壊するのではなくて、逆に、自然的に人間の間にありうる肉体的不平等のようなもののかわりに、道徳上および法律上の平等をおきかえるものだということ、また、人間は体力や、精神については不平等でありうるが、約束によって、また権利によってすべて平等になるということである。」[53]この市民社会の普遍的原理ともいうべきルソー的契約思想に対して、フォルスターは1つの態度を表明している。ここにルソーの名は挙げられてはいないが、フォルスターがルソーを念頭においていることはまちがいない。「他者の指示 Vorschrift」によって行動することは、「自己の意志の破棄」である。しかし、とフォルスターはいう。「この避けることのできない、否定的でもあり、肯定的でもある強制によって、理性は一歩前進した。人間は今やもはや自己の尊厳を肉体的強さのうちにではなく、正しくて善であるものの認識と選択のうちに感じたのである。ここで立法と市民的制度が成立した。それは人工の、壊れやすい機械装置である。しかし、その機械装置は高度な文化に道を開いた。文化の車輪がますます強引に、ますますスピードを出すにつれて、それはいっそう大きな進展の力を発揮した。」[54]ここには市民社会の正当性が、同時にその危険性がみごとに比喩の形で語られている。「美徳と悪徳はどこで

も同時的現象」なのだ、とフォルスターは記す。これは社会の現状に対するあきらめなのか。だが、もはや「自然の状態」にもどることは許されない。この時点で、フォルスターの思想と行動は激しい葛藤をくり返していたのである。

K.-G.ポップは論文『発見者クック』を、フランス大革命まえの「ヨーロッパ啓蒙主義哲学」の最後の時期における「証言力に富む記録」[55]として評価する。『発見者クック』はイギリスとフランスの哲学テーゼの影響を、さらに当時刊行されたカントとヘルダーの歴史哲学の著作の影響をうけた論文である、とする。いずれにせよ、やがてフランス革命へとつづく、この時点でフォルスターが未開人から文明人に至る過程を１つの進歩の運動として認識していたことは、まちがいない。そして文明が市民社会に達した現時点で、いかなる発展の未来図を描くか、それがフォルスターの大きな問題となっていたことは、前述したところである。

そこでわれわれはもう一度、『世界周航記』に立ち返り、南洋においてフォルスターが未開の世界をどのように観察していたか、その原点をながめたい。フォルスターのルソー理解の文脈でみれば、ルソーは未開状態を歴史化していない。ルソーは文明によって克服されるべき未開、あるいは逆に、現代文明に悪の萌芽を植えつけた未開として、未開の展開を考察していない。いったい未開状態にどんな胚珠が含まれているのだろうか。フォルスターはどのように観察しているのであろうか。

> ところでフエゴ島の住民はほとんど裸で歩いていた。礼儀と名誉心がヨーロッパ人に要求するはずの物には、いっさい無頓着である。かれらの身体の色はオリーブの褐色で、銅にも似た輝きを放っていた。いく人は、赤あるいは白の黄土をしま模様に厚く塗って、さらにけばけばしい色を装っていた。このことからして、飾りと装飾品の概念は、人間の名誉心と羞恥心よりもずっと古く、根深いように思われる。[56]

ここに引用したフォルスターのテキストから読みとるべきは、未開の概念が物質の形で表象されていることではないだろうか。あるときは、それは身体そのものであり、またあるときは化粧、装飾でもある。タヒチ島の北方に位置する島、ライアテア島で原住民との別離のさい、かれらの目に浮かぶ悲しみの涙を、フォルスターは「堕落していない、自然の子供」[57]の感情の吐露とみなす。それは人間に本来備わるべきやさしさであり、フォルスターはこの「心情の自然な動揺」を、決して未開人にのみ授けられた特性とは考えてはいない。未開人とヨーロッパ人を隔てるものは、ヨーロッパの「教育」である。彼我を区別するのは「教育」という歴史的制度である。すなわち、未開状態は制度という物によって認識されねばならない。

それではフォルスターは物を通じて、どのように未開状態を観察しているのであろうか。ニューヘブリデス諸島（現在バヌアツ共和国）のマリコロ島あるいはタナ島で、フォルスターはヨーロパ人には奇妙に映る風習を目撃する。たとえば、マリコロ島の奇習。腹部を綱できつく縛り、あたかも２つの部分から成るように形成された下腹部。（クックはそれを昆虫の「アリ」に譬えた。）母親の手でへこまされた新生児の頭。ペニスサックと挑発的とも見える女の腰蓑。[58]それらをまえにフォルスターは考える。「羞恥心」と「貞操」はヨーロッパの「教育」の結果にすぎない、と。「恥じらいと貞操は自然の状態では、それが美徳であるとはまったく意識されていない。」[59]フォルスターによれば、

自然の状態でかれらに課せられた最大の課題は生存することである。それを根拠にして、つぎのように推測がされる。綱や腕輪で身体を縛る風習は、体の成長を抑えて、わずかの食料でも生きていくことを可能にしているのではないか。もっぱら「必要性」が「自然に反するならわし」の原因ではないか。それが習慣となって維持され、いまは「ひとつの装飾」とみなされているのではないか。フォルスターの推測のなかで最も注目すべきは、つぎの点にある。島の土地は肥沃にみえるが、住民は「無為」を好む。よほど困苦にあえがないと、かれらは「働こうとしない」。「無為」は「文明化されていない、すべての小部族の通例の欠点」[60]である。

非文明社会の特徴は住民の怠けだけではなかった。フォルスターはタナ島で男女間の差別を知る。移動のさい、女だけが荷物を運び、男たちはのんびりとその傍らを歩いている話を、船員たちから聞かされた。フォルスターはつぎのように判断した。タナ島の住民はたいして「文明化されて」いない。男は女につらくあたる。そのように「いちばん卑しく、難儀な仕事」を押しつけるのは、「粗野で無教養な国民」のしるしである。[61]さらに別の個所でいう。「未開人」は女の「弱さ」を、保護を必要とする特性とは思っていない。逆に、それを「抑圧と虐待」を許す根拠とみる。というのも、「支配欲」は人間生来のもので、非常に強い力をもつ。とくに「自然の状態」では、人間は「無防備な人びとを犠牲にして」も、支配欲にふけるものなのだ。[62]

以上、マリコロ島とタナ島でフォスターは、人間の自然の状態あるいは未開の状態が示す特性を、2つ観察した。1つは未開人の「無為」であり、それは文明化の過程で克服されるべきものである。2つめは未開人のもつ支配欲である。それは教育によって「美徳」へと是正されるべきである。これらは啓蒙主義的見地からなされた批判である。

ただし、南洋の島々がフォルスターにとってもひとつの魅力であり、同時に解きがたい謎であったことを、われわれは忘れてはならない。とくにソシエテ諸島。「人間の心情の根源的善」はここでは「功名心、快楽、そのほかの欲情」[63]によって堕落させられていない。（フアヘイネ島）そしていわずもがなのタヒチ島。善意な住民が「美しい風土」のなかで、満足して暮らすさまを見るのは「このうえなくすばらしい感情」[64]を呼び起こす。と同時に、はじめてタヒチに滞在したとき認めた階級分化の兆候。あるいはトンガ（フレンドリー）諸島のうちのエウア島の身体の飾り。すなわち、「醜く化粧する」[65]風習というべき入れ墨、巻き貝・魚の歯などでこしらえた首飾り、耳たぶに開けた穴にぶらさがる亀の甲の飾り。老若男女を問わず、手の指を落とした人たち。頬骨のところにできた焼灼したような丸い点（「もぐさ」の跡か）。どれもこれも「奇妙なもの」Sonderbarkeit であった。フォルスターはこれらの奇習をことさら文明を基準として批判してはいない。比較の尺度をもたなかったゆえにであろうか。ただ南洋の旅は、エリック・リードのいうように、旅行者の「知識」を拡大し「知的様態に質的変化」[66]をもたらした、とみなすことができる。フォルスターが得た知識は、まさしくヨーロッパ外の貴重な体験がかれに伝えたものであった。

われわれは『世界周航記』における未開の問題を取りあげてきたが、最後にカニバリズムについて考察しないわけにはいかない。『世界周航記』においても、じつにしばしば人食いに関して記述されているからである。

4

突然、15人から20人のインディアンが道に現れ、引き返すよう、わたしたちにおおまじめに懇願した。わたしたちがその気をまったく見せないのを知ると、かれらは同じ懇願をくりかえした。しまいにはいろんな身振りによって、つぎのことをわからせようとした。わたしたちがこのまま前進しようとすれば、この土地の住民がまちがいなく、わたしたちを打ち殺して、食べるであろう、と。[67]

これはタナ島で植物採集に出かけたときの事件である。のちにわかったが、フォルスターの一行が進む先には、どうやら死者を葬る神聖な場所があったようだ。この場面で肝心なことは、原住民が異国人をその場所に近づけないために、「人食い人種」Menschenfresser を装っていることである。これはいかにもありそうな話である。弘末雅士氏は北スマトラを舞台に「食人」説話について論じ、つぎのように指摘する。「後背地の産物を独占的に集荷したい港市支配者と、外来者の危険から身を守りたい内陸民の両者にとって、『食人』風聞は外来者を内陸部に向かわせにくくする意味で重要であった。」[68]

問題はわれわれのフォルスターがじっさいに食人の現場を見たか、ということである。というのも、ピーター・ヒュームはクックの2回目の世界周航のさい、クックはニュージーランドではたして食人の光景を見たか、を問うているからである。ヒュームはクックの当該の記述からは、クックが食人の現場の「目撃者」 an eye-witness であると、100パーセントは確信できない、と説明する。[69]事実、マオリ族はヨーロッパ人との対話のなかで、「かれら自身のカニバリズムを誇張する」ことがあるからだ。ではフォルスターは『世界周航記』のなかで、その場面をどのように綴っているのであろうか。「ニュージーランド人はわたしたちの目のまえで、それ［＝焼いた頬の肉の一片］をがつがつとむさぼり食った。」[70]これは目撃者としての証言とみなすことができる。ヒュームが問題にしているクックの目撃の個所は、つぎのようにフォルスターによって記述されている。クックは船に帰ってくると、この「異常なことがら」をじっくり見たい、と言った。するとニュージーランド人たちは「この実験」を船員全員の面前で再現した。すなわち、フォルスターによれば、クックはまちがいなく人食いを見たのである。

フォルスターの記述の目的の1つは、人食いの「懐疑」を「実見によって」きっぱり否定することにあった。人間を書斎のなかでしか知らない「哲学者」がいたからである。「ニュージーランド人をほんとうの人食い人種と考えるに、もはやいささかの疑念もわたしたちにはなかった。」[71]これが思弁に対するフィールドワークの優位性の確認でなくて何であろう。しかし、われわれとて食人種に関し、ヒュームの憂慮を共有しないわけではない。いわゆる「...であったと記録されている」という語句に、ひとつの操作があるかもしれない。すなわち、「公平で正確な観察をやっておりますという一見素朴な装いの裏側に、別様であったかもしれぬ歴史をすべて隠蔽している」[72]可能性がある、というのだ。ヒュームが問題視するのは「植民地言説」であるが、フォルスターの記述であえて問題にするとすれば、その啓蒙主義的スタイルであろう。

人肉を食するという行為は、現代では猟奇的事件[73]の領域に入れられるべき類である。しかし18世紀後半の、ヒューム風にいえば「啓蒙主義的言説」においては、それは「人食いの習慣 Gewohnheit」[74]として、換言すれば、ヨーロッパ文明とは異質の制度として論じられる。フォルスターの時代においても、人食いの個々の事例はある。しかし、そのような「習癖」は「人間の社会の制度」とはなじまない。フォルスターによれば、人食いの起源は「未開の民族における復讐心」[75]にある。他方、「食人種」Cannibalen も知らぬ「蛮行」[76]はヨーロッパ人において見られる。王侯の名誉のために戦場で行われる大量殺戮、母親から乳児をもぎとって、犬に投げあたえる行為。ニュージーランド人の残虐な習慣は消滅するかもしれない、とフォルスターは考える。新しい「屠畜」が移入され、牧畜と農業がもっと多くの「過剰」をもたらし、住民たちをもっと親密に、「もっと社交的に」geselliger させるならば。制度が人の「心」を変えることができる。なるほどフォルスターの考えは楽天主義に過ぎる、といえるかもしれぬ。しかし、フォルスターが「社交」と「過剰」に注目している点は、啓蒙主義、さらにはのちの（空想的？）社会主義と視点を共有しているといってよい。

コロンブスの『日誌』における「食人種」の記述を扱う最近の論文の傾向は、近代ヨーロッパが食人種を「他者」として排除してきたことを強調する。自己を「高貴で啓蒙された」ものとして位置づける近代ヨーロッパは、他者を異常な人間として封じこめようとした。価値を決定し、差異を設定する「権力構造」[77]が作動していたのである。あるいはコロンブスが「食人」イメージにこだわったのは、「食人」が、いまだ形成途上にあったヨーロッパにとっての「他者」として機能したからである。[78] それは「暴力装置発動の正当化の根拠」[79]となった。

これらの論調を念頭において、フォルスターの食人に関する記述をながめるとき、そこに「他者」排除の思想は希薄であることに、一種の驚きを感じるのである。エコロジーから「ヨーロッパ帝国主義の謎」に迫ったアルフレッド・W・クロスビーが指摘するように、ニュージーランドを「植民地として理想的な場所」[80]と決めつけたキャプテン・クックのまえには、「他者」の排除を許さぬ困難が待ちうけていた。そのような状況を同行の博物学者とともに察知していたかもしれぬクックは、マオリを「味方」につけなくてはならなかった。もちろんそれはイギリス本国の指令であったことは、いうまでもない。博物学者フォルスター父子にとっても、植物・鳥・魚の採集にあたって、原住民の協力なくしてそれは不可能に近いことは、『世界周航記』が語るところである。

相当期間、南洋の住民とつき合ったフォルスターである。言語、風習、身体の特徴など、かれらの世界がフォルスターにとって、文字どおり異文化の世界、理解を越えた世界であったことだけは、まちがいないであろう。たがいに言語による意志疎通が満足になされえない関係において、いきおい感覚言語に頼らざるをえない場合も多々あったろう。そのような状況を考慮すれば、フォルスターが食人の習慣の起源を未開人に特有な（と思われた）「激怒」[81] Raserei に求めたことも納得できるのである。栗田博之氏の指摘によれば、最近のポストコロニアル研究と称される文脈にあっては、食人が「植民地言説」を特徴づけるものとして扱われる。しかし、と氏はつぎのようにいう。「慣習的食人を報告して来た人類学者は、決して『でっち上げ』を行ったのではない。整合性のレベルで判断されたものを民族誌上の『慣習的事実』として報告したにすぎないのである。」[82] もし上のフォルスターの記述に「でっち上げ」があるとすれば、食人の習慣を未開人の激しい復讐心に求めた点であろう。しかし、栗田氏によれば、戦争状態に突入し、血を血で洗う報復を避ける最も確実な方法は「ヒトの死に対し

て文字通りヒトの死で償うという方法であり、報復の対象となった者が身代わりに自分の子供を相手に差し出し、殺して食べてもらうということも行われた」。[83]とすれば、フォルスターと現代の民族学者、栗田氏を隔てる距離はきわめて小さい。

だが、フォルスターの食人観には啓蒙主義的色彩が濃く影を落としていることは、はっきり読みとれる。フォルスターは食人の習慣は「ただの憤怒から」[84] ***aus bloßer Wuth*** 生じた、と断じる。この言葉から、未開人は理性をもたない、という定式が読みとれる。それは何を意味するのであろうか。周知のように、啓蒙主義者レッシングは『賢者ナータン』[85]において、火事で妻子を死なせたナータンが、「怒り、狂った」Gezürnt, getobt 状態から、「理性」Vernunft と取りもどし、やがて「神のみこころ」を聞く場面（第４幕第７場）を挿入している。あるいは数千年後に、３つの宗教の宗派的憎悪が克服されんことを願う「３個の指輪」の話（第３幕第７場）を挿入している。この２つの場面の挿入は、理性による野蛮状態からの脱皮、あるいは遠い未来における人間の欲望の抑制、生活スタイルの普遍化を暗示するものであろう。フォルスターにとって重要なことは、人食いの断念が「文化への第一歩」[86]である、ということである。カニバリズムの廃止は未開から文明への発展にほかならない。しかしながら、食人という現代社会におけるタブー的領域、おそらく深層心理学の領域に下って行っても、なお黙するよりほかはなく、畢竟、神の支配を設定せざるをえないであろう領域を、フォルスターにおいて文明の発展に解消させたものは何であろう。あるいは本論の冒頭に挙げた「食人用フォーク」に痕跡を残すカニバリズムの秘儀を、あっさりと歴史化させたものは何であろう。

われわれはゲオルク・フォルスターの父ラインホルトの影響をそこに見ないわけにいかない。ラインホルトによると、食人の風習の起源は「飢餓」にはない。放縦な「教育」によって、子供たちは怒りっぽくなった。やがてかれらは自分たちを侮辱した敵から「血」の報復を求めるようになる。「文明化した民族 gesittete Völker」は人食いという嫌悪すべき習慣を卒業している。 しかし、食人種にみられる「野蛮な段階」は「もっと人間的な、もっと幸福な状態にいたる準備段階」[87]なのだ。「未開人は動物からほんの一歩離れているだけだ。」ラインホルトの『観察誌』（英語版、1778 ；ゲオルク訳のドイツ語版、1783）は、ゲオルクの『世界周航記』の執筆にさいしてよく利用された資料である。[88]『世界周航記』と『観察誌』に記された食人種についてのあい似た叙述は、ゲオルク・フォルスターにおける未開から文明への発展の概念が、多分にラインホルトから得られたものであることを、推測させる。ラインホルトの観察と着想を巧みな「文体」（『世界周航記』の英語ならびにドイツ語版の「序文」）にのせて、読者に供したのがゲオルクというところであろうか。ゲオルクは、みずからドイツ語に訳した父の『観察誌』を『ヘッセン学芸論集』（1784）において書評した。そこで未開と食人種に関する内容を、つぎのように紹介している。

> 文化のさまざまな段階、あの諸民族の道徳的完成のさまざまな段階。それによって確証された、あるいはむしろそれから展開された人間社会の進歩の理論。とりわけ、未開の状態から啓蒙と洗練の最高の段階への進歩。食人の起源について。[89]

われわれはゲオルクが風変わりだが、ヒューマニスティックな観察眼をもつラインホルトとともに、むつまじく南洋を逍遥していた光景を忘れまい。「南洋の島の人たちは」、とラインホルトは記述し

ている。「快い暖かさをどれだけ享受しているかに応じて、さまざまな段階の完成度にあるように思われる。」[90] 改革派の牧師であったラインホルトは息子に対し、ことあるごとに自然の至福と市民の至福を、正義と人間愛を、マニュファクチュア・市民社会の発展を語っていたのではないか。多感で傷つきやすい若者が、たとえ原住民の道徳悪なる行為を目撃することがあっても、それはラインホルトの人格によって、どれほど和らげられたことか。

「人間愛と思いやりという、人間関係の好ましい感情 die geselligen Empfindungen」[91]の喪失を憂慮して、ゲオルク・フォルスターは未開人の食人の風習を批判した。同時にかれは、未開人の食人の風習にも匹敵する、ヨーロッパ人の戦争による殺戮という負の蛮行をも批判した。南洋を手がかりとしたヨーロッパ批判とヨーロッパを手がかりとした南洋批判という、フォルスターの「二重の批判」[92]にラインホルトの「人間社会の進歩の理論」が一定の寄与をなしたことは、疑いえぬ事実であるように思われる。

注

ゲオルク・フォルスターのテキストは下記の版を用いた。

1. Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe. Hg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Berlin (Akademie Verlag) 1958 ff. それを AA と略記する。
2. Georg Forster: Werke in vier Bänden. Hg. von Gerhard Steiner. Leipzig (Insel Verlag) o.J. [1971] それを Insel と略記する。

1) 石森秀三(編著者):「南太平洋の文化遺産 ― 国立民族学博物館ジョージ・ブラウン・コレクション」編集協力・国立民族学博物館、千里文化財団発行、1999、32ページ。
2) AA Bd.2, S.133.
3) The Journals of Captain James Cook on his Voyages of Discovery. Vol. II, The Voyage of the Resolution and Adventure, 1772－1775. The Instructions by the Commissioners. Ed. by J.C.Beaglehole, Cambridge (Published for the Hakluyt Society) 1969, p. clxviii. (クック [増田義郎訳] :「太平洋探検」下、17･18世紀大旅行記叢書 4、岩波書店、1994、4ページ)
4) Steiner, Gerhard: Johann Reinhold Forsters und Georg Forsters Beziehungen zu Rußland. In: Studien zur Geschichte der russischen Literatur des 18. Jahrhunderts. Hg. von Helmut Grasshoff u. Ulf Lehmann. Bd.2. Berlin 1968 (Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Veröffentlichungen des Instituts für Slawistik. 28/2.) S.256.
5) Frenzel, Elisabeth: Motive der Weltliteratur. Stuttgart (Kröner Verlag) [4]1992, S.830 ff.を参照のこと。
6) AA Bd.3, S.281.
7) Der europäische Blick auf die andere Welt. Ein Vorwort. In: Die andere Welt. Studien zum Exotismus. Hg. von Thomas Koebner und Gerhart Pickerodt. Frankfurt a.M.(Athenäum Verlag) 1987, S.7.
8) Berg, Eberhard: Zwischen den Welten. Über die Anthropologie der Aufklärung und ihr Verhältnis zu Entdeckungs-Reise und Welt-Erfahrung mit besonderem Blick auf das Werk Georg Forsters. Berlin (Dietrich Reimer Verlag) 1982, S.135.
9) ツヴェタン・トドロフ (及川 馥･大谷尚文･菊地良夫訳) :『他者の記号学　アメリカ大陸の征服』法政大学出版局、1986、244ページ。
10) E.ギボン (中野好夫訳) :『ローマ帝国衰亡史 I』(ちくま学芸文庫) 1995、95ページ。
11) Forster, Georg: Vom Brodbaum. In: Insel, Bd. II, S.38.
12) Forster, Georg: Noch etwas über die Menschenraßen. In: AA Bd.8, S.142 ff. を参照のこと。
13) ルソー (本田喜代治・平岡 昇訳) :『人間不平等起源論』(岩波文庫) 1966、95ページ。
14) 前掲書、89 - 90ページを参照のこと。
15) 前掲書、87 - 88ページを参照のこと。
16) 前掲書、104ページ。

17) Peter, J.Brenner: Der Reisebericht in der deutschen Literatur. Ein Forschungsüberblick als Vorstudie zu einer Gattungsgeschichte. 2. Sonderheft. Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 1990, S.253.

18) Berg, Eberhard: Zwischen den Welten. S.116.

19) AA Bd.3, S.381.

20) Bitterli, Urs: Auch Amerikaner sind Menschen. Das Erscheinungsbild des Indianers in Reiseberichten und kulturhistorischen Darstellungen vom 16. zum 18. Jahrhundert. In: Soemmerring-Forschungen. Beiträge zur Naturwissenschaft und Medizin der Neuzeit. Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Mainz. Bd.6: Die Natur des Menschen. Probleme der Physischen Anthropologie und Rassenkunde (1750－1850) Hg. von Gunther Mann und Franz Dumont. Stuttgart・New York (Gustav Fischer Verlag) 1990, S.22.

21) Ebd., S.20.

22) Bougainville, Louis-Antoine de : Reise um die Welt, welche mit der Fregatte La Boudeuse und dem Fleutschiff L'Etoile in den Jahren 1766, 1767, 1768 und 1769 gemacht worden. Hg. von Klaus-Georg Popp. Berlin (Rütten & Loening) [3]1980, S.151. (ブーガンヴィル［山本淳一訳］：『世界周航記』17・18世紀大旅行記叢書 2、岩波書店、1990、158ページ)

23) Ebd., S.153. (ブーガンヴィル:『世界周航記』159ページ)

24) AA Bd.2, S.220.

25) AA Bd.3, S.382 を参照のこと。

26) AA Bd.3, S.382.

27) 山中速人:「太平洋『探検』とメディア」(岩波講座 『世界歴史 12、遭遇と発見』岩波書店、1999) 237ページを参照のこと。

28) 八杉龍一:『進化論の歴史』(岩波新書) 1969、18ページ。

29) 正木恒夫:『植民地幻想 ― イギリス文学と非ヨーロッパ ―』みすず書房、1995、123ページ。

30) AA Bd.3, S.383.

31) Börner, Klaus H.: Auf der Suche nach dem irdischen Paradies. Zur Ikonographie der geographischen Utopie. Frankfurt a.M.(Verlag Jochen Wörner) 1984, S.130. (ダンピア［平野敬一訳］：『最新世界周航記』17・18世紀大旅行記叢書 1、岩波書店、1992、506 - 507ページ参照のこと。)

32) Ebd., S.130.

33) Forster, Georg: Noch etwas über die Menschenraßen. In: AA Bd.8, S.153.

34) Forster, Georg: Neuholland und die brittische Colonie in Botany-Bay. In: AA Bd.5, S.174.

35) Ebd. S.178.

36) Ebd., S.180.

37) 豆州下田郷土資料館編:『ペリー日本遠征記図譜』(京都書院アーツコレクション 86 ＝［文庫版］1998) 所収のカラー図版は、異国としての日本を紹介していて興味深い資料である。

38) AA Bd.3, S.383 f.

39) AA Bd.5, S.705.

40) Ebd., S.193.

41) Ebd., S.194.

42) Hg. von Klaus-Georg Popp: Cook der Entdecker. Schriften über James Cook von Georg Forster und Georg Christoph Lichtenberg. Leipzig (Verlag Philipp Reclam) 1980, S.226.

43) AA Bd.5, S.197.

44) AA Bd.11, S.181.

45) Ebd., S.135.

46) Ebd., S.80.

47) Ebd., S.226.

48) Erhart, Walter: "Was nützen schielende Wahrheiten ?" Rousseau, Wieland und die Hermeneutik des Fremden. In: Rousseau in Deutschland. Neue Beiträge zur Erforschung seiner Rezeption. Hg. von Herbert Jaumann. Berlin·New York (Walter de Gruyter) 1995, S.49.

49) Ebd., S.49 を参照のこと。

50) Wieland, Christoph Martin: Beyträge zur Geheimen Geschichte des menschlichen Verstandes und Herzens. In: Ders. Sämmtliche Werke V. Bd.14, Reprint: Hg. von der >Hamburger Stiftung zur Förderung von Wissenschaft und Kultur< Hamburg 1984, S.140.

51) AA Bd.5, S.197.

52) Ebd., S.194.

53) ルソー（桑原武夫·前川貞次郎訳):『社会契約論』（岩波文庫）1966、41ページ。

54) AA Bd.5, S.196.

55) Popp, Klaus-Georg: Cook der Entdecker, S.226.

56) AA Bd.3, S.381.

57) AA Bd.2, S.335.

58) AA Bd.3, S.180 f.を参照のこと。

59) Ebd., S.181.

60) Ebd., S.183.

61) Ebd., S.228 を参照のこと。

62) Ebd., S.252 を参照のこと。

63) Ebd., S.97.

64) Ebd., S.55.

65) AA Bd.2, S.346.

66) エリック·リード(伊藤 誓訳)：『旅の思想史　ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』法政大学出版局、1995、81ページ。

67) AA Bd.3, S.233.

68) 弘末雅士:「近代植民地主義と『食人』— 北スマトラを舞台に」（栗本英世·井野瀬久美恵編：『植民地経験　人類学と歴史学からの アプローチ』人文書院、1999、294ページ。

69) Hulme, Peter: Introduction: The cannibal scene. In : Cannibalism and the Colonial World. Ed. by Francis

Barker, Peter Hulme and Margaret Iversen. (Cambridge University Press) 1998, p.21 - 24 を参照のこと。

70) AA Bd.2, S.403.

71) Ebd., S.403.

72) ペーター・ヒューム(岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳):「征服の修辞学　ヨーロッパとカリブ海先住民、1492－1797年」法政大学出版局、1995、21ページ。

73) ブライアン・マリナー（平石律子訳）:『カニバリズム　最後のタブー』青弓社、1993 を参照のこと。

74) AA Bd.2, S.405.

75) Ebd., S.406.

76) Ebd., S.407.

77) 本橋哲也：「人間の岸辺 — キャリバンと表象の政治学」(『思想』岩波書店、1999.3.) 39ページ。

78) 岩尾龍太郎：「浮遊する食人種記号 — コロンブス『日誌』を読む—」(『思想』岩波書店、1999. 3.) 66ページ参照のこと。

79) 前掲書、72ページ。野蛮なる「他者」に関する研究としてつぎの文献を挙げておく。アルデン・T・ヴォーン / ヴァージニア・メーソン・ヴォーン:『キャリバンの文化史』青土社、1999。

80) アルフレッド・W・クロスビー (佐々木昭夫訳) : 『ヨーロッパ帝国主義の謎 — エコロジーから見た10～20世紀 —』 岩波書店、1998、275ページ。

81) AA Bd.2, S.406.

82) 栗田博之:「ニューギニア『食人族』の過去と現在」（春日直樹編：『オセアニア・オリエンタリズム』世界思想社、1999) 147ページ。

83) 前掲書: 138ページ。

84) AA Bd.2, S.406.

85) Gotthold Ephraim Lessing : Werke und Briefe in zwölf Bänden. Bd.9. Frankfurt a.M.(Deutscher Klassiker Verlag)1993を参照のこと。

86) AA Bd.2, S.406.

87) Forster, Johann Reinhold: Beobachtungen während der Cookschen Weltumsegelung 1772－1775. Übersetzt von Georg Forster. Hg. von Hanno Beck (>Quellen und Forschungen zur Geschichte der Geographie und der Reisen< Bd.13) Stuttgart (Brockhaus Antiquarium) 1981, S.292 f.

88) AA Bd.4, S.136 を参照のこと。

89) AA Bd.11, S.104.

90) Forster, Johann Reinhold: Beobachtungen. S.255.

91) AA Bd.2, S.406.

92) Japp, Uwe: Aufgeklärtes Europa und natürliche Südsee. Georg Forsters >Reise um die Welt<. In: Reise und Utopie. Zur Literatur der Spätaufklärung. Hg. von Hans Joachim Piechotta. Frankfurt a.M.(Suhrkamp Verlag) 1976, S.40.